



TITLE:

イギリス革命における農民闘争評価の問題 - ソヴェトにおけるイギリス革命の研究(二) -

AUTHOR(S):

武, 暢夫

CITATION:

武, 暢夫. イギリス革命における農民闘争評価の問題 - ソヴェトにおけるイギリス革命の研究(二) -. 経済論叢 1956, 78(2): 197-217

ISSUE DATE:

1956-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/132487>

RIGHT:

經濟論叢

第七十八卷 第二號

世界經濟と経済学……………松 井 潜（1）

レーニンの市場の理論……………堀 江 英 一（13）

為替レート切下げの交易条件に与える効果……………西 川 徹（33）

イギリス革命における農民闘争評価の問題……………武 暢 夫（57）

〔昭和三十一年八月〕

京都大學經濟學會

イギリス革命における農民闘争評価の問題

——ソヴェトにおけるイギリス革命の研究 (二)——

武 暢 夫

初期ブルジョア革命における「農民層の革命的役割」については、マルクス主義の古典のなかで、再三、指摘されている。ところが、これまで、イギリス革命のときの農民運動の研究はあまりすすめられていないようであり、農民運動の弱さは農業問題にたいする農民の無関心のためだ、とかたづけられていたような多いが多い。しかし、一七世紀四〇—五〇年代はじめに各地におこった農民一揆のげしき、軍隊での農民の役割などを考えると、イギリス革命のときにも、農民運動のげしきを無視することはできない。クロムウェル自身は王制を廃止する意図をもたなかったにもかかわらず、チャールズの処刑、上院の廃止、共和国の宣言をかちとることができたのは、農民層と都市平民の力であった、と考えるわけにはいかない。それにしても、イギリス革命における農民運動の性格は、ひじょうに複雑である。ソヴェトの史学では、この問題については、とくに、エス・イ・アルハンゲリスキーが多くの労作を発表しているが、革命期の農業問題にかんするいくつかの重要な問題は、まだ、あきらかにされていない。たとえば、イギリスでは農民運動のげしきにもかかわらず、反地主的「農民戦争」がおこらなかった

たのはなぜか、ブルジョア的・地主的な農業問題の解決（軍役保有制の廃止）にたいして農民層はどのようにたてたのか、つまり農民的農業綱領があつたのかどうか、革命期の農民運動の地方的な型、ディッガーズの運動の評価——こういった問題がある。とにかく、フランス革命のときには、分割地的土地所有の創設というかたちで封建的土地関係が革命的に破壊され、フランスの農民層は、自分の土地にたいするブルジョア的所有権を獲得したが、イギリス革命のときには、イギリスの農民層は、自分の土地にたいするブルジョア的所有権を獲得することができず、地主的土地所有がのこされた。初期ブルジョア革命の核心は農業問題にあり、農業問題の民主的な解決こそ、民主主義的変革を完全に実現するための基礎である。したがって、イギリス農民層は革命的な役割をはたしながらも、新貴族とブルジョアジーが反農民的な農業立法を実行するのをゆるし、農村における農民的農業革命をなしとげることができなかったのはなぜか、いいかえれば、イギリス革命における農民運動のこのような弱さの原因はどこにあったかという問題は、革命だけでなく革命以後のイギリスの社会的・経済的發展にとって、ひじょうに、重要な意味をもっているのである。

註イギリス革命の農業問題について、アルハンゲリスキーは、『ヨーロッパ大学学術論集』、『ソ同盟科学院通報』、『中世』、『歴史学論集』などに、多くの論文を発表しているが、現在ではそのほとんどが入手困難であり、これに接することができなかった。アルハンゲリスキーの『一六四三—一六四八年のイギリス大革命の農業立法』第一部（一九三五年）および『一六四九—一六六〇年のイギリス革命の農業立法』第二部（一九四〇年）については、Ch. Hill, *Soviet interpretations of the English Interregnum*, Eco. H. R. vol. VIII, No. 2, 1398, p. 159—p. 167. のなかに、かんたんな紹介がある。また、一九五四年に発行されたコスミンスキーおよびレヴェイツキー篇『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』の第二章『イギリス革命の農業政策と農業立法』、第一章『革命期のイギリスにおける農民運動』は、アルハンゲリスキーの執筆である。

マルクスは、イギリス革命が保守的な性格をもっていたのはブルジョアジーと新貴族の同盟のためであることを指摘した (K. Marx, A Review of Guizot's Book, Why has The English Revolution been Successive? Marx Engels, On Britain, Moscow, 1953, p. 346~347)。「一七八九年のフランス・ブルジョアジーは、一瞬たりともその同盟者たる農民を見ずてはしなかった」(マルクス・エンゲルス選集〔大月書店版〕第三卷九七―九八ページ)のにたいし、一七世紀のイギリス革命のときのイギリス・ブルジョアジーは、農業問題の解決については、農民層と同盟せず、農民層の階級的な敵である新貴族と同盟した。革命期の農民闘争が敗北したのは、フランス革命とことなるイギリス革命のこのような階級配置に大きな原因があつたのだが、農民層そのものが一つの弱点をもっていた。これまでも、イギリス革命期の農民運動の弱さの原因として、一六―一七世紀を通じてイギリス農民層の階層分化がひじょうにすすんでいたことが指摘されている。たとえば、コスミンスキーおよびレヴィツキー篇『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』のなかで、イエ・ア・コスミンスキーは、革命のときの民主勢力の弱点を指摘し、とくに、農民層の弱さを、「初期ブルジョア革命の革命勢力である農民層は、一六世紀および一七世紀前半のイギリス農村に浸透し、共同体的關係を崩壊させ、農民層のはげしい分解―その利害がはげしく対立する富裕な上層部と多数の半農業プロレタリアートの分出―をひきおこした困込の波によって、すでに、ひじょうに弱められていたからである」(前掲書一〇ページ)と説明している。だが、コスミンスキーは、そのつぎに、「このことが、農民層はもはや階級としては存在しなくなり、共通の階級利害をもたなかった、ということの意味しないのもちろんであり、全農民層の利害は全体としては反封建的な性格をもっていたのだ」とつけくわえている。また、エス・イ・アルハンゲリスキーは、おなじ書物のなかの『革命期のイギリスにおける農民運動』をあつかった章で、イギリス革命のときの農民運動の一

般的な性格を説明して、革命のずっと以前からはじめていたイギリス農民層の分化の結果、農民層がいろいろのグループに分裂していたことに、イギリス農民層の弱さの原因があつたことを指摘し、「農民層は、そのいちじるしい部分が、本質的には、ちがった階級的グループに分解し、革命の全段階をつうじて、ブルジョア革命において農業問題をもっとも徹底的に解決するための闘争においては、もはや、統一した全体ではなかつた」(前掲書四二五ページ)とのべている。コスミンスキーも、アルハンゲリスキーも、イギリス農民層の階層分化がひじょうにすすんでいて、それが農民層の大きな弱点となつていたことを指摘した。だが、コスミンスキーのばあいには、それにもかかわらず、革命のときには、まだ階級としての農民層が存在しており、全農民層が共通の反封建的な目的をもつていた、ということが考えにいれられているが、アルハンゲリスキーによれば、このことはまったく否定されているようにみえる。だから、アルハンゲリスキーが革命期のイギリスにおける農民運動を説明したばあいに、農民運動のいろいろの地方的な型が説明され、レヴェラーズの運動とデイッガズの運動の特徴づけがおこなわれているが、農民運動の分散性と限界が指摘されているだけで、イギリス革命のときに農民層のはたした革命的役割の問題は、あいまいにされている。このように、イギリス革命期の農民運動の意義を正しく評価し、革命における農民層の役割の問題をあきらかにするうえに、農民層の階層分化の問題がひじょうに重要な意味をもつてくるのである。農民層の階層分化の程度をはっきりさせ、それを農民闘争の実際と関連させて説明することが必要である。しかし、この問題の重要性は、ソヴェトの史学でも指摘されているが、まだ、十分に研究がすすめられているとはいえず、重要ではあるが、未解決の問題として、のこされている。それだけではなく、ソヴェトの史学においては、イギリス農民層の特徴づけについて、「ヨーマンリ」という用語そのものの解釈について、意見のちがいが見られるので

あり、そこから、革命期の農民運動の評価、イギリス革命の農業綱領、ディッガーズの運動の評価についても、意見のちがいがうまれているのである。

一

ユ・エム・サプリーキンは、その論文『イギリス・ブルジョア革命史の若干の問題』（論文集『中世』第四集一九五三年三五四—三七〇ページ）のなかで、農民層とその「すぐれた革命的役割」の問題にふれ、イギリス革命のときの農民運動の特質とイギリス農民層の階層分化との関連を指摘し、農民層分化の問題の重要性を強調した。彼によれば、「イエ・ア・コスミンスキーが正しく証明したように、一三世紀には、商品・貨幣関係の発展とともに、農民層は、すでに、はげしく階層分化していたとすれば、一六—一七世紀には、この過程は、はるかに発展したのであり」（サプリーキン前掲論文三六二ページ）一六—一七世紀の農民層の上層部は、たんなる借地農から資本家的借地農に転化し、農民層の基本的大衆は、土地なき労働者、土地の少い保有者、すなわち半農民＝半プロレタリアートになった。サプリーキンは、このように農民層の階層分化の程度を、ひじょうに大きく評価している。しかし、一三世紀の農民層のたんなる財産上の分化と、一六—一七世紀の農民層の分化とを直接にむすびつけるのは、あまりにも単純な考えかたである。また、サプリーキンは、一六—一七世紀のイギリス農民層の分化がすすんでいることを指摘したばあい、トマス・スミス、ネヴィル、ウィルソン、チェンバリンなどの当時の著作者の叙述だけをよりどころとしている。

エム・ア・バルクは、一六—一七世紀のイギリス農民層の階層分化のすすんだことをみとめたがらも、全体とし

てのイギリス農民層の存在を考えにいれている。彼は、スチュアート朝のイギリス農村の中心をなすものはヨーマンであったとのべているが、彼のいうヨーマンとは、独立してその経営をおこなう農民であり、その大部分はコビー・ホールダーであった「エム・ア・バルク」『クロムウェルとその時代』一九五〇年四九一五〇ページ、『イギリス革命と農民的土地所有の運命（いわゆる『軍役保有制の廃止』について）（論文集『中世』第五集一九五四年五二ページ）。このように、バルクによれば、イギリスのヨーマンリは、コビー・ホールダーすなわちイギリス農民層の基本的大衆、つまり、中農層なのである。

サブレイキンは、バルクに反対して、ヨーマンを農民層全体と同一視することはできず、まして、ヨーマンをコビー・ホールダーと考えることはできない、とのべている。サブレイキンによれば、農奴制的な関係が支配していた一一一二世紀のイングランドに存在していた人身的に自由な農民『フリー・ホールダー』は、商品生産の発展とともにその数を増加し、一四世紀のイギリス農村には、ヨーマンリの名前をもつフリー・ホールダーからなる強固な農民の層が形成された。さらに、サブレイキンは、ヨーマンリをかたるばあいによく引用される諸文献を引用して、けっきょくのところ、ヨーマンとは、年四〇シリング以上の収入と州代議士の選出権とを有するフリー・ホールダーであるとする伝統的な考えかたにおちついている。だが、ヨーマンリについてのサブレイキンの見解には、いくつかの矛盾した点がある。彼は、ヨーマンを、主としてフリー・ホールダーズであり、「農村の富裕な上層および中層」である、と特徴づけながら、「ヨーマンを農村のもっとも富裕な上層部、大借地農、農業ブルジョアジ」とのみ考えることはまちがっている」とのべ、エンゲルスがヨーマンをイギリス農村地方の中農層と規定しているのを引用し、また、ヨーマンリの大多数は、労働力を定期的にそれも小規模に雇傭した中農層に属したのであ

り、その土地保有規模はだいたい二〇—二五ヘイカーであつた、と考へている。しかも、また、彼は、「ヨーマンリの基本的大衆の特性は、なによりもまず、自分の土地を所有してゐて富裕であることであり、その結果、ヨーマンは、農村のたんなる農民 (husbandmen) や土地をもたない階層とはひじょうにちがつた農村の一種の農民貴族となつた」という結論をくだしている (サブレットキン前掲書三六五—三六六ページ)。

註 D. Fortescue, *De laudibus legum Angliae* ed. by Chinn, Camb., 1842, p. 68-69; 58-59. Th. Smith, *De republica Anglorum*, Camb., 1906, p. 42-47. H. Latimer, *Seven Sermons before Edward VI*, Birmingham, 1869, p. 40-41. F. Bacon, *The historie of the reign of the Henry VII*, Lond., 1622, p. 74. W. Harrison, *Description of Britain*, Appendix, J. Harrington, Works, p. 288, 457. J. Winstanley, *Works*, ed. Sabine, 1941, p. 412. D. Chamberlayn, *Magna Britanniae Notitia*, Lond., 1727, p. 168-169, etc.

ヴェ・エム・ラヴロフスキーは、その論文『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命の若干の論争問題』(『モスクワ大学紀要』一九五五年第一号二七—四五ページ)において、「イギリス・ヨーマンリの分割地的小所有の發生の問題」と、「一七世紀四〇年代のブルジョア革命におけるイギリス・ヨーマンの役割」と、この革命がイギリス農民層にあつた結果の問題」をとりあげ、イギリス・ヨーマンリについてのソヴェトの歴史家たちの見解を批判している。彼は、そのなかで、ヨーマンリの解釈の問題と関連して、とくに、前に引用したサブレットキンの論文をとりあげ、サブレットキンのヨーマンリ解釈のなかにみられるいくつかの欠点を指摘し、バルクとおなじように、ヨーマンリは、封建的土地所有の解体から生じた農民の分割地的な小所有の代表者、すなわち、イギリス農民層の基本的大衆「コピー・ホルダーである、と考へている。

ラヴロフスキーによれば、「農民的土地所有の發展において、封建制度の解体期に……作用する重要な法則性の

一つの本質は、「封建地代の最後の形態である貨幣形態に移行するさいに、農民の占有権の成長と発展が生じ、貨幣地代がさらに發展すると、農民の占有権が完全な農民的土地所有に転化する」か、あるいは、「貨幣地代が資本主義的な地代に転化すると、農民土地の占有者は、土地をうしない、収奪される」という点にある（ラヴロフスキー前掲論文二八ページ）。「一四世紀末—一五世紀のイギリスにおける農民の占有権の強化は、封建地代形態の進化、とくに、封建地代の最後の形態である貨幣形態への移行とむすびついており」、賦役が金納化されるとともに、以前の農奴は、人身的に自由な農民にコビー・ホルダーに転化する。ラヴロフスキーは、イギリスにおいて、封建地代と封建的土地所有の解体期に広汎に、あらわれた人身的に自由な農民にコビー・ホルダーこそヨーマンリにほかならないと考えている。「コビー・ホルダーは、フリー・ホルダーの若干の部分とともに、農民層の基本的な大衆、一六—一七世紀のイギリスのヨーマンリ、すなわち小さな地面の自由な占有者、あるいは封建的に隷属した占有者を形成した」（ラヴロフスキー前掲論文二八ページ）というのである。このように、ヨーマンリの土地所有は、封建的土地所有の解体のなから生じたのであるが、「ヨーマンリは・・・一六世紀および一七世紀前半の資本主義的關係の發展を基礎として、また、その結果として、一七世紀のブルジョア革命のときに、歴史の舞台にあらわれたのである」（ラヴロフスキー前掲論文四〇ページ）。しかし、一五世紀のイギリスのヨーマンリの（そしてまた一五—一八世紀のフランス農民層の）占有権は、「農民的な、『封建的な看板』のかげにかくされた（すなわち『封建的』所有ではあるが、『ブルジョア的』ではない、つまり完全ではない）土地所有」（ラヴロフスキー前掲論文二九—三〇ページ）であって、完全な農民的土地所有ではなかった。ブルジョア革命の結果、フランスの農民層の占有権は、完全なブルジョア的所有にわかるが、イギリスの農民層の占有権（コビー・ホルド）は、完全なブルジョ

ア的な所有にはかわらなかった。このような考えかたは、バルクとラヴロフスキーの共同執筆になる論文『一七世紀前半のイギリスの新貴族とヨーマンリの社会的な本性について』（『歴史の諸問題』一九五五年第六号七八―八六ページ）のなかでも、展開されている。彼らは、いわゆる四〇シリング・フリー・ホールダーだけをヨーマンのなかにいれる伝統的な考えかたに反対している。もともとヨーマンの中核となったのは中世のマナーのフリー・ホールダーであるが、「ヨーマン」という用語は、時代を下るにしたがって、いろいろな意味につかわれるようになった。だから、ヨーマンリを特徴づけるばあい、ヨーマンの土地所有の法律的形態よりも、その社会的・経済的性格が重要である。バルクとラヴロフスキーによれば、ヨーマンリの基本的な特徴は、人身的な自由と経済的な独立であり、イギリスのマナー制度が解体するようになってはじめて、ヨーマンリという用語を、農民層の基本的大衆にあてはめることができる。ヨーマンリを構成するものは、「コピー・ホールダーの中層と長期のリース・ホールダーの一部」であり、「彼らは、すべて、伝統によって彼らが保有していた土地で、自立的な農民経営をおこなう単一の階級となった」（バルクおよびラヴロフスキー前掲論文八二ページ）。このように、ヨーマンリは、階級としての農民層として、とらえられている。そして、封建制度が解体し、資本主義関係が発生してくるとともに、「このできたばかりの自由な農民の階級は、農村の富裕な上層部と農村の貧農の階級とに両極分解して、あらひながされるようになった」が、「革命のときには、中農層、つまりヨーマンリは、まだ、階級としての農民であった」（前掲論文八二ページ）。

二

以上のように、三人のソヴェトの学者のヨーマンリについての考えかたを簡単に紹介したのは、ヨーマンリの解釈によつて、革命期の農民闘争の評価もかわつてくるからである。つまり、ヨーマンリの闘争の中心はなにであつたか、革命のときには農民のなかのどのような階層がどのような要求をかけたかという問題の評価のちがいは、ヨーマンリの解釈のちがひ、さらにまた、農民層の階層分化の評価のちがひから生ずるのである。

たとえば、バルクは、イギリスのヨーマンリは、革命のときには、「地代の値上げに反対し、そのコビー・ホルドをフリー・ホルドというかたちで自由な私的所有に転化するため、すなわち、農民の土地所有権の確認、農奴制の決定的な廃止、にくむべき教会の十分の一税の廃止のためにたたかった。だからこそ、ヨーマンは、イギリス革命の基本的な推進力となるのだ」(バルク『クロムウェルとその時代』五〇ページ)と考えている。ところが、サプリーキンは、「一七世紀のヨーマンの基本的大衆、そしてまた、富裕な手工業者の反封建闘争の主要な問題となつたのは、私的所有を王権による制限から解放すること、商業および企業活動の自由、国家制度、司法制度、教会などの民主化の問題であつて、けつして、地主的土地所有の廃止あるいはコビー・ホルド廃止の問題ではなかつた」(サプリーキン『前掲書』三六六ページ)という意見である。ヨーマンリを、コビー・ホルダー全体としてのイギリス農民層、すなわち、中農層とみるか、それとも、富裕なフリー・ホルダーから成る農村上層、すなわち、農民層の一部とのみ考えるかの見解のちがひから、ヨーマンリの闘争の評価についても、このような見解のちがひがうまれたのである。バルクによれば、ヨーマンの戦闘的民主主義は、コビー・ホルド廃止によつて説明されるが、サプリーキンは、それを、たんに、「私的所有の自由」ということだけで説明する。したがつて、サプリーキンのばあいには、ヨーマンリは、革命的な階層としてはとらえられていない。「イギリスでは、なんらか財産を有する

ことがほとんど罪惡であると考えられるようになったとき、都市と農村の富裕な階層、とりわけ成功したヨーマンは、人民の反封建的な革命ときっぱりとをわかし、とどのつまりが、クロムウエルのブルジョア・地主独裁の支柱になった」(サプリーキン前掲論文三六六ページ)というのである。

しかし、問題は、ヨーマンリの解釈のちがいだけにあるのではない。バルクとラヴロフスキーは、サプリーキンのようなヨーマンリの理解をもとにするならば、「イギリス革命の決定的な推進力は、大農層、すなわち『農村貴族』であって、全体としての農民層ではなかったという結論にたつする」(『歴史の諸問題』一九五五年第六号八一ページ)として、サプリーキンを批判しているが、この批判は正確ではない。たしかに、サプリーキンは、ヨーマンリを革命のブルジョア・地主陣営にむすびつけ、イギリスのヨーマンリ全体としてのイギリス農民層の革命的役割を見のがしている。しかし、サプリーキンは、かたらずしも、彼の考えているようなヨーマンリ(富裕なフリー・ホルダーズ)「農村貴族」が革命の推進力であった、と考えているわけではなく、人民の反封建闘争の意義を、考えにいれている。ただ、人民の反封建的な革命の主力は、サプリーキンのばあいには、全体としての農民層ではなくて、農村の貧民大衆―貧しいコビー・ホルダー、小屋住農その他―、および、都市平民であった。サプリーキンが、このように、全体としてのイギリス農民層の役割を見のがしているのは、彼が一六―一七世紀の階層分化をひじょうに大きく評価して、革命のときにはイギリス農民層は農業問題にたいして統一した態度をとることができなかった、と考えているからである。また、バルクがヨーマンリをイギリス革命の推進力であると考えて、ヨーマンリの革命的役割に基本的な重要性をもたせているのは、彼が、農民層の階層分化がすんだことをみとめながらも、革命のときにはまだ階級としてのイギリス農民層が存在していたということを、考えにいれているからであ

る。こうして、農民層の階層分化の評価がちがうにしたがつて、農民闘争の評価、さらにまた、イギリス革命における農業綱領の評価が、ことなってくる。

イギリス革命におけるブルジョア的・地主的農業綱領（軍役保有制の廃止）の反農民的な性格については、すでに、十分指摘されている。階級としてのイギリス農民層を地主制度の犠牲にしたイギリス革命の農業立法は、フランス革命の農業立法と対照的である。一六四六年二月二十四日の条令による軍役保有制の廃止と後見裁判所の廃止は、「革命のつぎの世紀の農民的土地所有の運命を決定した」（エム・ア・パルク『イギリス革命と農民的土地所有の運命（いわゆる『軍役保有制の廃止』について）』論文集『中世』第五集一九五四年五一ページ）。この条令によって、封建的土地関係が廃止されたが、それは、新貴族とブルジョアジーに有利なように、一面的におこなわれたにすぎないからである。つまり、新貴族とブルジョアジーの土地所有者は、土地にたいする封建的制限から解放され、土地にたいするブルジョア的な所有権をえるが、農民層の基本的大衆——コビー・ホルダーは、土地にたいするブルジョア的な所有権を獲得することができず、封建的義務から解放されなかったばかりか、新貴族とブルジョアジーの地主が土地にたいするブルジョア的な所有権を獲得したことによって、伝統による土地所有の「保証」までもうしなってしまうたからである。一六四六年二月二十四日の条令は、一六五六年十一月二七日の特別条令によって、確認され、強化されている。その付則には、従来マナーの領主に支払われていた慣習地代と Heriot はひきつづいて支払われなければならない、とある。そして、ステュアート朝の王制復古ののちも、農業問題の解決は、有効なままにのこされたのである。

註一六四六年二月二十四日の条令、「後見裁判所およびすべての保護権（wardship）は……本日より廃止される。また、すべての

臣従保有制(tenure by homage)および所領移管にたいするすべての許可料(mue)……およびそれに附随する他のすべての負担も同様に廃止される。また「すべての軍役保有制(tenures by knight service)は……自由保有制(free and common socage)に変更されること」(C. Hill and E. Del. The Good Old Cause, p. 413)。この条令は「コビー・ホルドの問題にはならぬとふれていない。軍役保有制廃止の憲議についてはじめて指摘したのは、マルクスである。マルクスは、『資本論』第二四章(『資本論』【青本文庫】第四分冊二一〇五ページ)のなかで、こういつてゐる。「スチュアート王朝復興のもとでは、土地所有者たちが横暴行為を法律によって遂行した……。彼らは封建的土地制度を廃止した。すなわち、土地の負う國家への給付義務をふりすて、農民層その他の人民大衆にたいする課税によって國家の損害を『賠償』し、彼らが封建的名義を有したにとどまる領地の近代的私有権を要求し、最後にかの居住法を制定するに至った……。ソヴェトの研究者はマルクスのこの問題提起から、大きな示唆をえたようである。

このように、軍役保有制の廃止が農民層の將來の運命にわるい影響をおよぼしたことはあきらかであるとしても、農業問題のこのようなブルジョア的・地主的解決にたいして、農民はどのようににたかたか、農民層は、ブルジョア的・地主的農業綱領にたいして、自らの農業綱領をもっていたかどうか、という問題は、はっきりしていない。

サプルーキンは、一六四〇—一六六〇年の革命のときには、イギリス農民層の財産上の分化がはげしく、農民のいろいろのグループの農業問題にたいする態度はまちまちであつたので、統一した農業綱領をかかげることは不可能になつた、と考へてゐる。これにたいして、バルクあるいはラヴロフスキーは、革命のときにはまだ階級としての農民層が存在していたと考へ、農民の統一した農業綱領が存在したとしてゐる。そのばあい、バルクやラヴロフスキーは、「コビー・ホルドの廃止」という問題を、とくに重視してゐる。バルクによれば、「革命前の封建的土地所有の全体のなかで、コビー・ホルドは、もっとも広汎な、もっとも無権利な、もっとも制限された、重

税でもっとも苦しめられた農民的保有であり・・・」「したがって、当然、コビー・ホールドを廃止し、それを *common law* の *free socage* にかえることが、農民にとって、もっとも重要な、もっともさしせまった問題であり、革命の年に農村におこった反封建闘争の核心であった」(論文集『中世』第五集一九五四年五三ページ)。「コビー・ホールドの廃止」こそ、農民的農業綱領の本質をなすものであった。ところが、サプリーキンは、「コビー・ホールドの廃止」の問題を、このように重視してはいない。彼は、「コビー・ホールドの廃止」の問題にたいするいろいろのグループの態度はさまざまであり、そのため、「コビー・ホールドの廃止の要求はにぶらされた」(サプリーキン前掲論文三六七ページ)と考えている。「コビー・ホールドの廃止」は、フリー・ホールドのあいだでは、問題にならなかった。すでに、コビー・ホールドのあいだにも階層分化がすすんでおり、この時代には、コビー・ホールドには、ジェントリやブルジョアジのすがたもみられる。一六―一七世紀のイギリス農村の資本主義のもとでは、農民やジェントリやブルジョアジのなかからでた成功した経営者にとっては、地代の額が固定しているコビー・ホールドは、むしろ、有利であった。したがって、革命のときには、コビー・ホールドの問題の解決について、いろいろ妥協的な提案があらわれている。たとえば、レヴェラーズのコビー・ホールドにたいする態度はあいまいであり、人民協定のなかでは、コビー・ホールドの廃止の要求はかけられていない。レヴェラーズの影響のもとにかかれたパンフレットのなかでは、「買いとり」によってコビー・ホールドをフリー・ホールドにすることがのべられている。また、人民協定のなかでは、コビー・ホールドの買いとり価格を二〇年の収入としている。一六五四年の短期議会では、コビー・ホールド廃止の問題は提案されることがきまらず、*fine* を固定することだけが提案されることになった。富裕なコビー・ホールドが、このように、買とりによってコビー・ホールドをフリー

・ホールドにする、あるいは、たんに *fine* を固定するという態度をとつたのにたいして、コピー・ホルダーの基本的大衆は、問題のこのような解決に満足しなかった。貧しいコピー・ホルダーの要求は、コピー・ホルドを無条件に廃止することであり、それは、レヴェラーズではなく、ディッガーズの綱領に、はつきりとあらわれている。ディッガーズは、広汎なコピー・ホルダーの大衆の立場から、コピー・ホルドの問題のもっとも徹底的な解決法（マナーの領主の権力からコピー・ホルダーを解放すること、共同地の開放、マナー法廷の廃止、地代、*heriot*、その他もろもろの封建的義務の廃止）をかかげたのであるが、サプリーキンによれば、ディッガーズの綱領の中心は、「コピー・ホールドの廃止」ではなくて、「財産の平等」あるいは「財産の共有」の要求であつた。バルクヤラヴロフスキーも、ディッガーズこそコピー・ホルダーの権利の眞の擁護者であり、コピー・ホルドの問題の徹底的な解決方法をおしすすめたのである、と考える点では、サプリーキンとおなじである。しかし、彼らは、ディッガーズの綱領の中心は「コピー・ホールドの廃止」の要求であつて、「財産の共有」の要求は、「運動全体の実践的な要求ではなかった」（『歴史の諸問題』一九五五年第六号八五ページ）、と考えている。ここに、ディッガーズの運動をどのように評価すればよいのか、という問題が、さらに、提起されるのである。

三

ソヴェトの史学でも、イギリス革命のときにあらわれた諸党派（長老派、独立派、レヴェラーズ、ディッガーズ）の特徴づけは、かならずしも、はつきりしているとはいえない。このことは、とくに、イギリス革命の民主勢力（レヴェラーズとディッガーズ）の評価について、いわなければならぬ。しかし、レヴェラーズについては、

その評価は、だいたい一致してきたようである。たとえば、アルハンゲリスキーは、リルベンとレヴェエラーズを、「イギリスの農村における資本主義発展の民主的な道のためにたたかった闘士」であると考へて、これをラヴロフスキーに批判されているが、コスミンスキーおよびレヴェエラーズ篇『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』（一九五四年）のなかでは、またべつの考へかたをしめしている。そこでは、彼は、「レヴェエラーズの綱領の重点は農業問題にはなくて、選挙権の拡大、政治制度におけるブルジョア民主主義の要求にあった」のであつて、「レヴェエラーズは小ブルジョアジーのイデオログであり、富裕な農民、借地農業者、フリー・ホルダーなどの農村の所有者階級一般の利益を反映してはいるが、農民層の基本的大衆の利益を満足させる農業綱領をあたえず、農民の利益となるような土地問題の解決をあたえず、新地主に奉仕した」のであり、レヴェエラーズの運動が成功しなかつた重要な原因の一つは、「レヴェエラーズは、農業綱領がなかつたために、ひろく農民層を結集することができなかった」ことである、と考へている（前掲書四一九ページ）。コスミンスキーも、主として都市小ブルジョアジーの党であるレヴェエラーズは農民層の利益を表現しえなかつた、と考へている（『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』一一ページ）。レヴェエラーズが一貫した農業綱領をもたず、農民層の利益を代表することができなかつたとすれば、農民層の利益を真に代表するような党派はなにか、あるいは、農民層はどのような党派をついにもつことができなかったのか、という問題が生ずる。

註 アルハンゲリスキー『一七世紀の四〇—五〇年代の革命におけるイギリス農民層と農民層の革命への参加』（ゴリーキー大学学術論集『一九四七年』）にたいするラヴロフスキーの批判ラヴロフスキー『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命の若干の論争問題』（『モスクワ大学紀要』一九五五年第一号三七ページ）。ラヴロフスキーは、ここでは、「レヴェエラーズは、『イギリスの

農民層との交渉」がなかった」といつているが、レヴェラーズにしても、農民運動にまったく無関係ではなかった。軍隊のなかで敗北したのち、レヴェラーズは、ランカシャの貧民の叛乱、ダービシヤの炭坑夫の運動、リンカンシヤのエブラス・マナーの農民運動のような民衆運動に支持を求めようとした。しかし、その階級的な性格からいって、レヴェラーズは、農民層の利益を代表することはできなかったのである。

レヴェラーズが農業問題についてあいまいな態度をしめしたのにたいして、ジェラード・ウインスタンリは、一九世紀のイギリスで軍役保有制廃止の本質を見ぬいていた唯一の人であった（サプリーキン『ハリントンの政治綱の階級的本質』論文集『中世』第四集一九五三年二六二ページ。バルク『イギリス革命と農民的土地所有の運命』論文集『中世』第五集一九五四年五五ページ）。サプリーキンも、バルクやラヴロフスキーも、ウインスタリこそコビー・ホールダーの利益の眞の擁護者であり、イギリス革命のときのもっとも徹底した民主主義者であった、と考えている点では、意見が一致しているように見える。じつさい、ヨーマンリの解釈の問題とちがって、ディッガーズの運動の評価では、サプリーキンは、バルクやラヴロフスキーの考えかたに、あるていど、ちかづいていようである。しかし、よく検討してみると、両者のあいだには、やはり、見解の相違がある。それは、すでにのべたように、ディッガーズの綱領の評価にあらわれている。

バルクとラヴロフスキーは、革命のときには二つの農業綱領、すなわちブルジョア的・地主的綱領と農民的・平民的綱領があった、と考えている。軍役保有制の廃止後、コビー・ホールド廃止のための農民のたたかいは、とくに、はげしくなり、このころ、コビー・ホールドに反対する多くのパンフレットがあらわれたが、ウインスタンリは、軍役保有制廃止の本質そのものをうたがひ、それにたいして、農民的農業革命の綱領をかかげた、というので

ある。そのさい、彼らは、ディッガーズの運動のなかには「平等主義的・共產主義的な」傾向だけでなく、なによりもまず、「一般民主主義的な」内容をみなければならぬ、と考えている。ディッガーズの運動の絶頂期（すなわち一六四九年）にあらわれたウィンスタンのパンフレットの主要な思想は、「一般民主主義的な農民層の要求」、つまり、「コビー・ホールドをマナーの領主の支配権から解放すること、すなわちコビー・ホールドをフリー・ホールドにかえること」であった。革命のときに国のなかの全民主勢力を結合することができる唯一のスローガンとなったのは、「コビー・ホールド解放の要求」であり、それがディッガーズの運動の中心であった、というのが彼らの意見である。しかし、サプリーキンによれば、ディッガーズの運動の中心は、「コビー・ホールド廃止」の要求ではなくて、「財産の平等」と「財産の共有」の要求であった。

両者のこのような見解のちがいは、やはり、革命までのイギリス農民層の階層分化にたいする評価のちがいによるものと思われる。バルクとラヴロフスキーは、一六一七世紀前半の農民層のはげしい階層分化にもかかわらず、革命のときにはまだ階級としての農民層が存在していたと考え、全体としての農民層の役割を考えにいれていく。ウィンスタンの農業綱領はひじょうに包括的であり、土地なき *other* の要求とともに、コビー・ホールダーズのすべての要求をふくんでいた（論文集『中世』第五集一九五四年五五ページ）。だから、バルクとラヴロフスキーによれば、ディッガーズの運動の主体は農民であり、ウィンスタンは、イギリスのヨーマンリーのイデオログすなわち農民層のイデオログとして、とらえられる。だが、サプリーキンは、革命までのイギリス農民層の階層分化をひじょうに大きく評価し、革命のときにはすでに階級としての農民層はなく、農村のいろいろの階層は、農業問題にたいして一致した態度をとることはできなかった、と考えている。サプリーキンによれば、ディッガーズの

運動の主体は、「土地の少い農民、農業労働者——cotters、零落し、自立性をうしなっている手工業者、職なき貧民、種々雑多の都市平民——すなわち、困込による農民の収奪の結果として、また、自立した手工業者と農民の財産上の分化の結果としてあらわれた都市や農村のすべての貧民」(サプリーキンのウィンスタンリ著作集にたいする評論、論文集『中世』第五集一九五四年三三二ページ)であった。つまり、ディッガーズの運動の主体は、半農半プロレタリアートなのであり、ウィンスタンリは、ヨーマンリイギリス農民層ではなく、前期プロレタリアートのイデオログ(論文集『中世』第五集三三二ページ)として、理解されている。だが、サプリーキンの意見によれば、一七世紀のイギリスの前期プロレタリアートは、まだ、小経営小所有との関連をうしなつてはおらず、それが、ディッガーズの思想に小生産者の・農民的性格をあたえている。それは、すべての人々の平等による小規模な個人的な農民の・職人的な生産にもとづいて、私有から、また、人間が人間を搾取することから、人類を解放するという考えかたに、また、土地にたいする平等の要求にあらわれている、というのである。

従来、ディッガーズ運動といえば、ふつう、農村プロレタリアートの運動としてとらえられ、その平等主義的・共産主義的な側面のみが強調されてきた。また、ウィンスタンリやディッガーズの他のパンフレット作者の思想的影響はべつとして、ディッガーズの運動そのものは小規模なものであり、実際上の影響は小さなものであった、という考えかたが支配的であつたようである。^{註二}これにたいして、バルクとラヴロフスキーが、ディッガーズの運動を農村プロレタリアートではなく、農民層の運動としてとらえ、農民の農業革命の担当者、革命の農民的・平民的コースの代表者として、ディッガーズの運動にひじょうな重要性をもたせているのは、たしかに、あたらしい考えかたであり、重要な問題提起であらう。そのさい、彼らは、ディッガーズの運動が敗北した原因を、イギリス革命の特

殊な階級配置（ブルジョアジーと新貴族の同盟）と一六一一七世紀前半のイギリス農民層の階層分化によって説明し、一方、ディッガーズの運動の重要性は、農民層の分化にもかかわらず革命のときにはまだ階級としての農民層が存在していたということと説明する。だが、この問題を解決するためには、ラヴロフスキーもいくどとなく強調しているように、マナーの史料の具体的・歴史的な研究によって農民層の階層分化の状態を具体的にしめすこと、それをディッガーズの運動およびその他の農民運動の実際と関連させて説明することが必要であり、問題はなお今後このこされているといわなければならない。また、バルクとラヴロフスキーは、ディッガーズの運動の一般民主主義的な側面を強調するはあい、「財産の共有」の要求は運動の平民的流派の影響ではあるが、大勢には影響のないものとしてかたんにかたづけ、また、ウィンスタンリの思想的傾向を二つの時期にわけて区別し、ディッガーズの運動の絶頂期にはウィンスタンリの思想に一般民主主義的要求が多くあらわれ、ディッガーズの運動が敗北して実際の運動が終ったのちにはじめて共産主義的な傾向があらわれたのだ、と考えている。だが、ウィンスタンリの思想がそのようにうつりかわったのはどのような事情によるものであるかについては、説明されていない。ウィンスタンリの著作を、農民運動のじっさいと関連させながら読むことが必要である。

註一 たんてん E. Bernstein. Socialismus und Demokratie in der grossen englischen Revolution. tr. as Cornwell and Communism. Ch. Hill. The English Revolution. 1941, p. 69.

註二 たんてん M. James. Social problems and policy during the puritan revolution 1630—1660.

ところで、バルクとラヴロフスキーも、サブライキンも、ディッガーズの共産主義思想を、ディッガーズの前期プロレタリア的側面とむすびつけて理解しているように思われる。それは、バルクとラヴロフスキーのばあい、デ

イッガーズを革命の農民的・平民的コースの代表者としてとらえながら、もっぱらディッガーズの農民的側面とその実践的意義を強調し、財産共有の要求は、運動の平民的流派の影響であり、実践的意義のうすいものとして、ひくく評価する、つまり、ディッガーズの共産主義思想を農民的側面ときりはなして考えているところに、うかがわれる。サプリーキンが、「ディッガーズは、すべての人びとの土地にたいする平等の権利の要求から、私有の廃止の理想へみちびき、こうして、この権利に反資本主義的な傾向をあたえた」(中世』第五集三三二ページ)とし、「財産の平等」と「財産の共有」の要求こそディッガーズの運動の中心であった、と考えているのは、彼が、ディッガーズの半プロレタリア的側面を重視するところからきているように、思われる。しかし、ディッガーズの共産主義思想が農民に由来するの、前期プロレタリアートに由来するのにかつては、ここで、はっきりいうことはできず、今後の問題である。このディッガーズの思想の発生の問題をはっきりさせた上で、ディッガーズの運動の歴史的意義、イギリス革命における農民層と平民層の役割の問題、革命が農民層と平民層にあたえた歴史的意義の問題を、考えなおしてみる必要があるように思われる。

このように、イギリス革命における農民闘争の問題についても、ソヴェトの学者のあいだには、意見のこととなる点、いろいろ問題となる点が少なくないが、彼らの研究のなから、多くの重要な問題、とくに、ディッガーズの再評価の問題、それと関連して、イギリス革命の農民的・平民的コースの再検討という問題が提起されていることは、大きな意義をもつものと思われるのである。